

取材・文 中東生
Text: Shinobu Naka日本歌曲《初恋》をも歌う
次世代のディーヴァ

1996年ザルツブルク音楽祭。大御所歌手達が勢揃いした《フィガロの結婚》で、膨らみ過ぎた期待に比べて個々の短所が目立つた中、一番驚きだったのが、ランカトールのバルバリーナ役でのデビューだった。それから19年が経った今年2月21日、ジェノヴァのカルロ・フェリーチェ歌劇場で《ランメルモールのルチア》の初日を終えて中日、満足感溢れる彼女にお話を伺った。

——デビュー時の印象はいかがだったでしょうか。

ランカトール(以下R) おとき話の中にいるようで幸せだったという以外、何も覚えていません(笑)。18歳半の私には、世界に名だたるザルツブルクで見る全てが夢のようでした。共演者のことも誰一人知らず、ザルツブルクの街中に貼つてある彼らのポスターを見て、その片隅にあるレコード会社のロゴから「有名な歌手なんだなあ」と理解したほどでした。

今でも母のアドヴァイスで
勉強し続ける

——歌手への道はどのように。

R 父がクラリネット奏者で、母が歌手なので、小さな頃からヴァイオリンとピアノを弾いてはいましたが、家で歌ったことはありませんでした。14歳の時、ヴァイオリン教育の一環でロッシニの《小莊嚴ミサ曲》に合唱として参加させられたのですが、その時、人間の声の広がりを感じて、息せき切つて家に帰り「歌が勉強したい！」と夢中で訴えたの



《連隊の娘》マリーを歌うランカトール © Teatoro Real / Javier del Real

が始まりでした。オーケストラの人達からは「全員で歌っていて、君の声だけは遠くまで聞こえる」とも言われました。驚いた母は「思春期が過ぎるまで待ちましよう」と言ったのですが、その間も私の熱い想いは変わりませんでした。そこで16歳から母が教え始めてくれました。母が教える技術を持っていた、そしてそれが私に合ったということは、本当

にラッキーなことでした。今でも母のアドヴァイスで勉強し続けています。

母のモットーは「蜂蜜のように歌う」ことです。「蜂蜜のように途切れることなくレガートに」「蜂蜜のように甘く」「蜂蜜の色のように温かく」……。ただ、母は歌手としてのキャリアを築いたわけではないので、その後ローマのマーガレット・ペーカー・ジェノヴェージ先生についてレパートリーを完成させましたが、母と同じ音楽的技術を持っていたので、相反することなく、二人の先生から相乗効果を得ながら学べました。

母の声はソプラノ・リリコから、どちらかというとドラマティコよりなので、私の一種深い響きは母から譲り受けていると思います。自然なアジリタは絶対に父のクラリネットに影響されているはずですが、父が出す最高音Esのカーンとした響きなんか耳に染み付いていますから(笑)。そしてヴァイオリンを学んだことも、アジリタには役に立っていますし、何よりも全ての音楽性を培ってくれました。

本番では役に没頭

——歌を通して伝えたいものは何でしょうか

D それはエモーションです。私がいま、演じている役になりきってエモーションを感じれば、それが聴衆に伝わると思っています。例えば今演じている《ルチア》は、苦しみと悲しみと絶望の三種の感情が入り交じっている役です。そして狂気まで達するのですが、初日の公演では、自分がどう動いたか忘れてしまっています。そういう時は、本当にルチアになりきれている時で、その日の「狂乱シーン」は、きつと聴衆も一緒に感じてもらえる真実味があったと思います。それによるリスクもあります。器楽奏者でも指が滑ったりなどの事故はありますが、歌手は体が楽器で、なおかつオペラでは動き回るので、事故の可能性は高くなります。そのために毎日研鑽を積んで、事故の発生率は極力抑えているつもりなので、本番では役に没頭しないといけません。私が聴衆の中にいたら、冷静

に技術をコントロールしている歌では満足できませんから。私はよく、聴衆の立場に立って考えてみるのです。自分が聴きたいと思う歌をお聞かせしたいです。

無理せず声の向かうところに任せる

——好きな役柄は。

R いっぱいあり過ぎて……。歌っている役は全部好きです。好きでない役は歌いません。例えば去年の10、11月にマドリッドで歌ったドニゼッティ《連隊の娘》のマリーは、ロラン・ペリーがナタリー・デセイのために演出したのですが、マリーの性格の深みが表現されていて大好きでした。

あと、ヴェルディ《椿姫》のヴィオレッタも大好きです。13年1月にモンテカルロでデビューして以来、ウィーンやパレルモ、オマーンでも歌いました。

——ヴィオレッタはチューリヒ歌劇場で拝見していますが、貴女のヴィオレッタには心を打たれました。

R それは嬉しいです。今年7月にトリノで歌った後、10月にはやっと日本でご披露します。

今後歌いたいのはマスネの《マノン》です。

——ヴェルディ《オテロ》のデステモナはいかがでしょう。

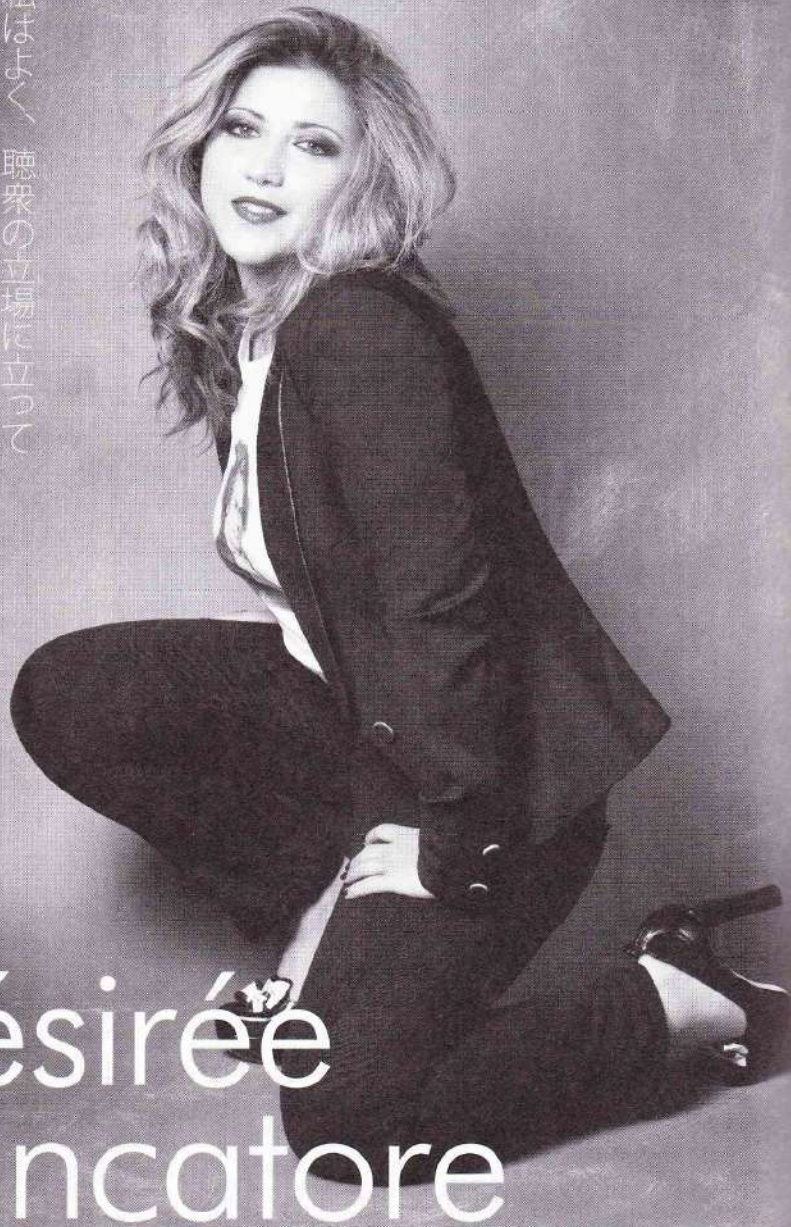
R それは興味深い質問ですね。このところ声がより成熟し始めていることを顕著に感じるので、5、6年先には歌えるような気がします。無理はせずに声の

向かうところに任せます。

——ディーヴァについてはどのようにお考えでしょう。

R 確かに歌手としては、ディーヴァのカテゴリに分類される役柄を歌っていることから、私もディーヴァの範疇に入ってしまうでしょうが、舞台の上でも役柄を離れれば、聴衆に対しても、私は一般にディーヴァと称される人間ではありません。私は普通の人間です。現在の私があるのは、弛まぬ努力の賜物であって、私が何者かになったわけではないということに常に意識して、地

「私はよく、聴衆の立場に立って考えてみるのです」



Désirée Rancatore

に足を着けて生きていますし、私の性格はディーヴァ的なものではないと思います。キティちゃんが大好きですし(笑)。

日本へのメッセージ

——日本との関わりについてお聞かせください。

R 日本デビューは07年ベルガモ・ドニゼッティ歌劇場日本公演の《ランメルモールのルチア》で、それ以来日本が大好きで住みたいくらいですが、少なくとも1年に2回は行きたいです。日本の聴衆

は、音楽を楽しむために準備万端に整えて劇場に来てくれ、本当に大切にされ、愛されているという実感が持てます。

リサイタルでは日本へのオマージュのために日本語の歌を歌いたいと思ひ、主催者が教えてくれた、YouTubeに上げられたマリエツラ・デヴィーアが歌う《初恋》(作詞・石川啄木/作曲・越谷達之助)を聴いて気に入り、いつも歌っています。それは私から日本への愛のメッセージです。